

姫路赤十字病院などの看護師、事務員ら 医療用ガウンを手作り



ポリ袋活用 備蓄の確保に工夫

姫路市内の医療機関で、新型コロナウイルスから医療従事者を守る使い捨てガウンの不足が続いている。一部の病院では看護師や事務員らがポリ袋で簡易ガウンを手作りするなど、備蓄の確保に工夫を重ねている。

医療用ガウンは基本的に患者1人ごとに交換する。病床数560の姫路赤十字病院(同市下手野1)では、

90センチポリ袋を裁断して医療用ガウンの代用品を作る姫路赤十字病院の看護師ら(姫路市下手野1)

医師や検査技師、看護師らが、長袖と袖無しの各ガウンを毎日計800枚近く使うという。しかし2月下旬から物流が滞り、必要数の調達が難航するようになった。

5月15日時点で既製品のガウンの備蓄は約2万枚。全国的な不足で定期的な入荷が見通せず、この量だけでは約1カ月で底をつくという。4月末からは各病棟

の看護師や事務員が業務の合間を縫ってポリ袋をはさみで切り、簡易ガウンを手作りしている。これまでに2千枚以上を作ったが、看護部の太田加代副部長は「院内感染を防ぐため、常

に適正数を維持していく必要がある」と危機感を募らせる。

姫路聖マリア病院(同市仁豊野)でも、3月初旬から顔を覆って飛沫感染を防ぐ「フェースシールド」が不足し、看護師と事務員が手作りして代用。4月以降はガウンの備蓄が減り、消費量が多い半袖を優先してポリ袋から1日に約200着を作り続けた。

同病院感染管理室の今川嘉樹師長は「北九州市のように感染拡大の第2波が来たら、1日に使う量は一気に増す。一枚でも多く備蓄しておくことが大切」と話した。(地道優樹)